十勝野

道徳教育地域教材

はじめに

本年度から小学校において、次年度から中学校において、「特別の教科　道徳」が完全実施となることを機に、各学校においては、道徳教育に係る指導計画の見直しや、指導方法の工夫・改善等、道徳教育を充実させようという機運が高まっております。

十勝教育局としましては、十勝管内教育推進の重点に、『考え、議論する道徳』の授業改善に向けた道徳教育の充実」を掲げ、児童生徒の道徳性の育成に向け、各市町村教育委員会及び各学校にお取組いただくようお願いしているところであります。

このような中、道徳教育の一層の充実に資するため、北海道教育委員会作成の「きた　ものがたり」に続き、十勝に視点を当てた本地域教材「十勝野（とかちの）」を作成しました。

本地域教材は、学習指導要領の趣旨を踏まえ、郷土の先人や偉人の逸話を基に、生命の尊厳、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材に取り上げ、児童生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような教材を目指し、小学校低学年向け、中学年向け、高学年向け、中学校向け（二編）の計五編を作成するとともに、教材の巻末に中心的な発問の例を記載しました。

各学校においては、中心的な発問例を参考に、それぞれの学校・家庭・地域の実態に応じて本書を積極的に御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の作成に当たって、御尽力いただきました関係各位に、心から御礼申し上げます。

平成三十一年三月

十勝教育局長　大　橋　則　之

もくじ

〈小学校低学年用〉
一　じぶんのよさをのばす【個性の伸長 A（4）】　しみず ひろやす　…3
〈小学校中学年用〉
二　広い心で【公平、公正、社会正義 C（12）】　大川 宇八郎　…5
〈小学校高学年用〉
三　社会のために役立つ喜びを【公共の精神 C（14）】　岩元 悦郎　…7
〈中学校用〉
四　郷土を愛する【郷土を愛する態度 C（16）】　丸谷 金保　…10
五　強い意志をもって【克己と強い意志 A（4）】　渡辺 カネ　…13

一　じぶんのよさをのばす【個性の伸長　A（4）】

しみず　ひろやす

ひろやすは、小さい　ころから　たくさんの　スケート大会で　ゆうしょうしてきました。オリンピックに　出場し　金メダルを　とるなど　日本を　だいひょうする　スケートせん手として　せかいで　活やくしました。

著作権の関係上、Web上への写真の掲載はできません。

冬きオリンピック長野大会でレースをする　ひろやす（写真：ロイター／アフロ）

ひろやすが、はじめて　スケートぐつを　はいたのは三才の　ときでした。二番目の　お姉さんが　お父さんと　こおりの上を　すべるようすを　見て　いっしょに　すべりたくなったのでしょう。ひろやすは、だれにも　教えてもらわずに　こおりの上に　立って　あそぶように　なりました。

「ひろやすは　すごいなあ。スケートに　むいているね。」

と、お姉さんに　言われて　うれしくなった　ひろやすは、お父さんと　いっしょに　スケートの　れんしゅうに　む中に　なりました。

ひろやすは、体の　小さい　子どもでした。そのため、ひろやすが　お父さんと　いっしょに　スケートの　れんしゅうを　していると　まわりの　人たちから、

「あんなに　小さくて　スケートを　やるのは　む理だよ。」

と言われることが　ありました。

それでも　ひろやすと　お父さんは「体が　やわらかければ　体の　大きい　子にも　まけない。」と考えました。れんしゅうの　ときには　ストレッチを　くりかえして　体を　やわらかく　していきました。また　体を　少しでも　大きくするために　すききらいせず　何でも　食べるように　しました。

ひろやすは、友だちと　あそびたい　ときにも　時間を　きめて　あそびました。そし

て　れんしゅうの　時間に　おくれることは一ども　ありませんでした。体の　大きな子に　まけないように、海で　すなはまを　はだしで　走ったり、足の　ゆび先で　タオルを　つかんだりする　れんしゅうも　しました。夏には　自てん車に　のって　体をきたえつづけました。

毎日の　ように　れんしゅうを　したので　ひろやすは、スケートの　大会で　よいせいせきを　のこすように　なりました。

ひろやすは、高校生に　なったとき、スケートの先生から、

「教えることが　ほとんどない。」

と言われるほど　スケートが　上たつしていました。そのころ　ひろやすは、北海道で　スケートせん手として　多くの　人に　知られるように　なっていました。そして　ひろやすは、二十三才のときに日本だいひょうに　えらばれ　冬きオリンピック長野大会に　出場しました。いよいよ　ひろやすの　レースが　はじまりました。スタートと　同時に　ひろやすの　ロケットスタートが　きまりました。せかいの　どのせん手よりも　はやく　矢のような　スピードで　すべりました。

ひろやすは、大会の　一番の　タイムで　ゴールしました。会場に　いた　人たちが　いっせいに　はく手を　おくりました。ひろやすは、りょう手で　高らかに　ガッツポーズを　しました。

体の　小さな　ひろやすが、自分の　とくいな　スケートで　ど力しつづけ、体の　大きな　せかいの　せん手たちに　かち、金メダルを　かくとくしたことは　日本中の　人たちに　ゆう気を　あたえました。

著作権の関係上、Web上への写真の掲載はできません。

冬きオリンピック長野大会で１位になりガッツポーズをする ひろやす（写真：読売新聞／アフロ）

◎　なぜ、ひろやすは　きびしいれんしゅうを　つづけられたのでしょうか。

◆　あなたの　よさは　どんなところですか。

二 広い心で【公平、公正、社会正義 C（12）】

大川宇八郎

明治十三年（一八八〇）年、岩手県人大川宇八郎＊翁が最初の＊和人としてこの地に定住し、多くの＊入植者を助け開拓の祖として＊敬慕された。（大川宇八郎顕彰碑＊碑文より）

宇八郎は、一八五五年、岩手県九戸郡軽米（現在の岩手県軽米町）で酒屋の長男として生まれました。

「大川宇八郎顕彰碑　碑文」〔音更町〕

「北海道へ移住しよう」と決めたのは、宇八郎の家の酒屋が、とう産したことと、北海道に大きなゆめをもったからでした。

一八七七年、宇八郎は、日高へわたり、一八七八年、サッテキオトフケ（現在の音更町下士幌）にうつり住みました。日高から山をこえてやってきた宇八郎は、十勝で強い力をもっていた有力者の家をたずね、「新しい土地で、アイヌの人たちとともに、生活をしながら商売をしたい」と話しました。次の日から、宇八郎は、アイヌの人の家々を回り、毛皮をゆずってもらうかわりに、塩、油、日用ざっ貨品などをあげました。毛皮が集まると、十勝川を舟で下り大津（現在の豊頃町大津）に行って売りました。

宇八郎は、けっしてあくどい商売をしなかったため、しだいにアイヌの人たちからの信用が高まり、宇八郎のもとには多くの毛皮が集まるようになりました。大雪で多くのシカが死に、ほかの毛皮商人も商売にならなくなって十勝からいなくなりましたが、宇八郎のところにはいつものように毛皮が山のように集まりました。

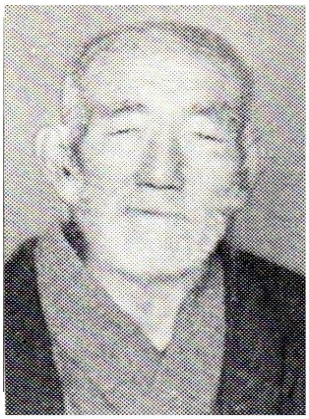
一八八三年、宇八郎は、コタンの有力者の娘ヨイカサンと結こんしました。これによって、宇八郎とアイヌの人との仲はいっそうよくなり、宇八郎の家には、いつもアイヌの人たちが何人も住みこむようになりました。このころから、宇八郎は、農業や、馬と牛などを飼育することに力を注ぎ、サッテキオトフケを中心に山野を切り開いて農地にしました。

バッタの大発生や大こう水がおそった十勝でしたが、ゆたかな大地を目指し入植者が次々とふえてい

きました。宇八郎は、入植者に、作物の種をあたえたり、馬や農具の使い方を教えたりしました。病人が出てこまっている家のことを聞けば、馬と農具を持って出かけ、畑をたがやして回りました。

こうして、宇八郎の人望は高まり、同時に、農場の方も発てんしていきました。最せい期には馬百五十頭、牛八十頭を飼育する大牧場となりました。

こうした宇八郎には、＊公職の話が持ちこまれることもありましたが、「そんな堅苦しいことはきらいなしょう分でなあ。協力してくれというなら、どんなことでも協力するが公職だけはごめんだ」と言ってきょひし続けました。しかし、宇八郎をたよって来る人たちは年ごとにふえ、「食べる物がなくて」とやってくれば、「イナキビがあったろう」と分けてやるし、「金がなくて」と頭を下げてくれれば「少しくらいなら」とあげていました。そうすることで、二十八万二千三百坪もあった農場も、少しずつ面積をへらし、馬や牛の数がへってきました。一九二六年ころになると馬や牛はもとより、農場のほとんどが人手にわたっていきました。


〔音更町所蔵〕

「人様にうらまれるようなことを何一つしなかったことが、せめてものわたしのほこりとするところだ」と言い残し、一九三七年十一月、宇八郎は、愛し続けた音更の土にかえったのでした。

＊翁…男の老人のこと
＊和人…アイヌの人たちとそうでない日本人を区別させるために用いた言葉
＊入植者…開たくのためにうつり住んだ人のこと
＊敬慕…うやまい、したうこと
＊碑文…石碑にほりつけた文章
＊公職…町会議員などの職のこと

◎　宇八郎が、自分のざいさんをへらしてまで、こまっている人を助けたのは、なぜだろうか。

◆　あなたは、だれに対しても分けへだてしないで、公平にしようとしていますか。また、公平であるためには、どのような気持ちで生活することが大切だと思いますか。

三　社会のために役立つ喜びを【公共の精神　C（14）】

岩元悦郎

岩元悦郎は、一九三七年、私立帯広盲あ院の開設、帯広盲学校の初代校長への就任、札幌ライトハウスの設立など、九十二年間の長い人生を、障がい児教育に注ぎこんだ人物です。

〔「ほっかいどう百年物語」より〕

悦郎は、一九〇七年、上川支庁南富良野村（現在の空知郡南富良野町）で生まれました。生まれつき、視力が弱い子どもでしたが、悦郎は、不自由を感じていませんでした。

小学生のころ、黒板の文字が見えないと、先生が小さな黒板に書き直して持ってきてくれたり、ふぶきの日には、友達が風で飛ばされないよう心配して、取り巻くように送ってくれたりと、周りの親切を身をもって感じながら育ちました。

「大人になって手術をしたら、かなり見えるようになる。」と札幌の眼科医から言われたことで、将来への希望をもつことができ、目の不自由さが苦にならなくなりました。

しかし、一九二五年、十九歳の時に札幌の眼科に入院し、何度も手術を重ねましたが、失敗に終わり、わずかに読めていた本の文字まで見えなくなってしまいました。悦郎は、くやしさで、

「どうしてこんなふうに産んだんだ。」

と言って、母親を責めたこともありました。

悦郎は、二十一歳の時、小樽の親せきに、小樽盲あ学校への入学をすすめられました。初め、悦郎は断りましたが、しきりにすすめられたため、入学を決心しました。

小樽盲あ学校で、最初に先生に一枚の紙を差し出されました。指でさわると蚕の卵のような感しょくでした。先生は、「これが点字というものです。これからはこれで勉強します。」

とやさしく言いました。

これが悦郎の点字との出会いでした。

悦郎は点字に興味をもち、数日で点字の本を読めるようになりました。

その後、東京盲学校で教師の資格を取り、二十九歳の時、母校の小樽盲あ学校に教員として帰ってきました。希望に燃えて教師となり、子ども達のためにがん張ろうと思った悦郎

でしたが、教師として毎日がん張っても、「盲人は世の中で必要とされない者」だという思いを消すことはなかなかできませんでした。

一九三七年、教師生活三年目に入るころ、悦郎は菅原ヒデと結こんしました。ヒデは、＊口話法を学んで言語障がい児の教員をしていました。

そのころ、道内には盲あ者のための学校は、札幌や函館など五か所しかなく、道東にはありませんでした。そのため、悦郎は、

「目や耳の不自由な子ども達に勉強を教えることができたら、社会のために役立つ人生になるのではないだろうか。」

と妻のヒデに話すと、賛成してくれ、一九三七年四月、全く知らない土地、帯広へとおもむきました。

一人の知り合いもいない帯広でしたが、一けんの民家を借り、「帯広盲あ院」の看板をかかげました。

授業料や学校の設備、教科書等の費用を全て無しょうとしました。それらの経費をまかなうため、午前中の授業が終わると、悦郎は、午後はあんま、はりきゅう、マッサージの治りょうをして仕事にはげみました。

学校を開設した直後に、日中戦争が始まり、生活は苦しくなるばかりでした。それでも、悦郎は、信らいして子どもを預けてくれる親達のために、

「どんなことがあっても、学校はやめないぞ」と自分に言い聞かせました。

終戦後、教育制度の改革が行われ、私立学校に対する基準が厳しくなり、帯広盲あ院がそれらの基準を満たすことは不可能に近くなりました。一九四八年、いよいよ閉さかと覚ごしていた時、日本の障がい者の福し向上を目的に来日したヘレン・ケラーが北海道の各種し設を視察することになりました。北海道教育委員会は、それを記念して、私立の盲あ学校を公立にすることにしました。こうして、同年十月一日、帯広盲あ院は道立帯広盲・ろう学校に生まれ変わり、閉さすることはなくなりま

「帯広盲学校の運動会で、生徒に賞品を渡す岩元校長」
〔「ほっかいどう百年物語」より〕

した。

悦郎は、帯広盲学校の校長、妻のヒデはろう学校の教師となり、夫婦になって初めて給料を手にし、働いて得る賃金の大切さを改めてかみしめました。

校舎や体育館が改築されるとともに、教師や児童・生徒も増え、帯広盲・ろう学校は順調な発展を続けました。

その後、悦郎は、札幌盲学校に転任しました。

一九六九年三月、小樽、帯広、札幌で勤めた三十四年間の教師生活に終止ふを打ちました。

悦郎は、退職後、自身の経験を生かし、

「目の不自由な人々のためになることは何だろう。」

と夫婦で話し合った末に、図書館を設立することを決心しました。

当時、図書館は全国で四十か所ほどありましたが、点字本は大変少なかったのです。悦郎は、退職金で盲人のための福しし設である「札幌ライトハウス」を設立しました。

札幌ライトハウスでは、道内各地からの希望に応じて、点字本やテープを貸し出す活動を行いました。その他にも、市からたのまれた仕事としてタイプライターや時計等の貸し出し、つえ・点字機等の盲人用具の取りまとめ等も行いました。

悦郎とヒデは、ライトハウスで、朝から夜まで無報しゅうで働きました。無報しゅうにもかかわらず、二人はライトハウスでの活動が少しも苦になりませんでした。全国から貸し出し本に対する感想文が送られてくることで、仕事に生きがいを感じていたからです。

一九九八年の暮れ、悦郎は、息を引き取りましたが、障がいがあっても、十勝の厳しい寒さにたえながら学習にはげみ、力強く生きぬいていく児童生徒を育てるという悦郎の思いは、今も帯広盲学校の教師達に引きつがれています。

＊口話法・・・ちょう覚障がい者に対して、話し手の口の動きや表情を読み取る読話、正常な発音器官を訓練しての発語の手法のこと

◎　悦郎が、障がいのある人々のために生がいをつくしたのはなぜでしょう。

◆　今まで、自分が働いたことで他者の役に立った経験はありますか。

四　郷土を愛する【郷土を愛する態度 C（16）】

丸谷金保

一九七六年十月三日、ワイン城前の広場は、五千人を超える人たちでにぎわいました。昨夜からの雨がうそのように上がり、十勝晴れの青空の下、ブルガリアの国際ワイン・コンクールで、十勝ワイン（赤）が大金メダル、十勝ワイン（白）とブランデーが銀メダルを受賞した祝賀パーティが開催されました。祝賀パーティには、ブルガリア大使も、十勝ワインへの賛辞を送るため、メダルを持って出席しました。

〔池田町ブドウ・ブドウ酒研究所所蔵〕

この日の前日、池田町議会では、丸谷町長が辞意を表明し、この祝賀パーティは、丸谷町長の送別会にもなりました。

「ワイン町長」の愛称で親しまれた丸谷金保が町長に就任したのは、一九五七年のことでした。

当時の池田町は、一九五二年の十勝沖地震と、二年続きの冷害で町税の収納率が大きく低下し、国から「*財政再建団体」の指定を受けていました。丸谷は、慢性化した財政赤字に苦しむ町を、「赤字を二年間で返済する」と訴え、見事、町長に当選したのでした。

丸谷が町の再建として始めに手がけたのは、ブドウ栽培でした。

池田町の風物詩といえば、真っ先に思い浮かぶのがコクワと山ブドウでした。丸谷は、子どものころ、かごを手にして山に入り、山ブドウをいっぱいとってきては、口のまわりを紫色に染めながら、たらふくほおばったのでした。

「そうだ！ブドウでいこう！」

一九六一年、山梨県から苗木を導入し、町民の希望者全員に分配しました。丸谷は、ブドウが農家の庭先や空き地に植えられ、ブドウの房が池田町のあちこちでたわわに色づき、この町の景色が一変することを想像しながら、町のイメージチェンジを図ろうとしたのでした。

一九六四年、北海道全域が厳しい冷害に襲われました。春過ぎから天候の不順が続き、秋の気配が兆す頃になると凶作が決定的となりました。各家庭に配付された素人が栽培するブドウなど、生き残れるはずがありませんでした。

「何が新しい町の産業としてのブドウづくりだね。こんな寒いところでブドウが育つはずがないよ。」
このような非難は丸谷の耳にも届きましたが、表だった反論はしませんでした。
ブドウの木が全滅したことで、町長への風当たりは厳しくなりました。しかし、そんな中、ブドウづくりを応援し続けた人たちがいたのでした。それは、「ブドウ愛好会」の農業青年たちでした。
「ゆくゆくは池田町の山林をブドウ畑にしようじゃないか。眠っている山林を活用すれば、池田町の農業は必ず復活する。」
丸谷の言葉に賛同する農業青年や町の職員は、ブドウ栽培について勉強し、品種の改良に努力を重ねました。
ある日のこと、ブドウ栽培の指導に来ていた専門家が、池田町の山ブドウを手にしながらこう言いました。
「池田町の山ブドウは、貴重なアムレンシス系統かもしれないよ。」
アムレンシス系のブドウとは、ロシアのアムール川流域が原産地で、良質のワインの原料となり、日本には自生していない品種とされていました。
「よおし、ワイン造りでもやってみるか。」
農業が*基幹産業であった池田町では、豊作のときは農作物の値段が低くなり、いわゆる「豊作貧乏」と言われるように、農家の収益が不安定になることが課題でした。丸谷は、ワイン造りを始めれば農家の収入をぐっと安定化できると考えたのでした。
「ワインは豊作のときのブドウを原料にしたほうが良質のものができ、価格も高い。なるほど、豊作貧乏の心配もないわけだ。」
こうして、町民の理解も少しずつに得られ、池田町のブドウづくりとワイン造りが始まったのでした。
一九六四年の秋、池田町のワイン「第一号」をハンガリーの首都ブダペストで開かれる国際ワイン・コンクールに出品することとなりました。ワインには「十勝アイヌ山葡萄酒」と即席で名付け、ボトルにはワラ半紙に*ガリ版で間に合わせたラベルを貼り付けました。
折しも、冷害の痛手が深刻な事態を迎え、ブドウ畑が全滅し、「町長にだまされた。」と丸谷への風当たりが強い最中、池田町のワインが見事入賞したのです。
大喜びの丸谷たちは、受賞したワインをさっそく町民に飲

んでもらいました。

ワイン造りの危機を逃れた丸谷は、冷害ショックを克服するための次なる手を考えていました。それは、この冷害のため、完熟しなかったブドウを活用するブランデー造りでした。

ブドウの酸が強くないとよいかおりが出ません。完熟しないブドウで造ると良質になるブランデーに、丸谷は目を付けたのでした。

「豊作の年はワインを造り、作況の悪い年はブランデーを造る。ブランデー造りが軌道に乗れば、これで池田の農業が安定する。鬼に金棒だ。」

こうして、丸谷はブドウづくりを推し進め、一九六四年には「池田町ブドウ・ブドウ酒研究所」を設立し、日本で初めての自治体ワイン「十勝ワイン」を誕生させました。

一九七〇年には町営レストランを開業させ、四年後には「ワイン城」を完成させるなど、関連の事業を次々と軌道に乗せ、池田町と「ワイン町長」は全国的に知られる存在となりました。

丸谷が、自身の送別会となった受賞祝賀パーティの中で、お別れの挨拶をすると、「乾杯！ワイン町長！」と誰かが叫びました。「乾杯、乾杯」と大勢の人が応えてくれている様子を見て、丸谷はただ茫然と壇上に立ちつくしたままでした。ワインで酔ったほほに涙が流れました。

丸谷は、池田町を根底で支えてきた町民一人一人と、この充足感を共有できたことに感謝していたのでした。

「ワイン城」〔池田町ブドウ・ブドウ酒研究所所蔵〕

＊財政再建団体…収入を大きく上回る赤字を抱え、自力では再建できなくなり国の指導・監督を受けることとなった地方自治体

＊基幹産業…一町の経済を支えている重要な産業

＊ガリ版…謄写版原紙と呼ばれる薄い特殊な紙に小さい穴をあけ、この穴から印刷インキを押し出して印刷する方法

◎　丸谷町長にとって、町づくりの原動力は何だったのでしょう。

◆　あなたはこれまで、地域を大切にする取組をした経験はありますか。

五　強い意志をもって【克己と強い意志　A（4）】

渡辺カネ

「淋しいだの、退屈だのという暇はちっともありませんでした。」

渡辺（旧姓　鈴木）カネは、一八五九年、江戸（現在の東京都）で、信州上田藩の家臣鈴木親長の長女として生まれました。

〔帯広百年記念館所蔵〕

当時はまだ、「女子には学問はいらない」という風潮でしたが、父から、漢文、和文、書道、そろばん、論語、儒教など多くのことを教わりました。

一八七五年、カネが十六歳の時、思いがけなく勉学の機会を与えられ、共立女学校（現在の横浜共立学園）に入学することになりました。

父から様々なことを教わっていたカネでしたが、初めての英語には、苦労しました。洋書を片手に地理の勉強、英語暗唱など昼夜を惜しまず取り組みました。最初は、カネも戸惑っていましたが、半年も経つと英会話ができるようになりました。また、アメリカ人の先生が指導する寄宿舎の生活では、西洋的な食事や日常生活のマナーなどを教わりました。

カネは、二十三歳のときに、共立女学校英学部を卒業し、母校に留まり、助教師となりました。

文明開化が強く叫ばれている時に、高い教養を身に付けた同校の出身者は、外交官などの妻になる者が多かったのですが、北海道開拓に関心をもっていた父の影響を受け、カネは、開拓者の妻の道を選ぶことになります。

「我が家は、武士では無くなったのだから、新しい土地の北海道に渡り、農業を始めたい。未開の土地を開拓して農業を行うことで、生活することもできる。私と銃太郎は、北海道開拓に行くことにした。」

と父が決意を伝えました。

晩成社の事業に参加していた兄の銃太郎は、北海道へ渡ることをすでに決意していました。

「お父さまの行くところならば、どんなところにも行きます。」

とカネは答えました。

カネを北海道に連れて行くには、誰かと結婚した方がいいだろうと考えた父は、晩成社の一員である渡辺勝との結婚をカネに薦めました。

カネにこの話を持ち出すと、

「お父さまのおっしゃることに従います。」
とカネははっきりと返事をしました。
一八八三年、カネは、渡辺勝と結婚しました。
北海道行きが迫ったある夜、共立女学校のピアソン校長は、カネに、自身が四人の子や夫に先立たれたことや外国人と日本人の間に生まれた子が、親に見捨てられていることを知り、日本に渡る決意をしたことなどを話し、
「北海道の開拓も大変でしょう。あなたもできる限りのことをしなさい。」
と言って、カネに神の守りと導きがあるように、と祈ってくれました。カネは、外国から日本に骨を埋める覚悟で己を無にして働いているピアソン校長のことを思えば、自分が夫の待つ北海道に行くことなど問題にもならない小さいことだと悟りました。
一八八三年九月、カネは北海道に渡りました。帯広に着いたカネは、新しい土地に住み慣れる間もなく、開拓者の妻として、活動を始めました。それは自宅に晩成社の子どもやアイヌの子どもたちを集め、読み書きを教える塾を開くことでした。
塾といっても、＊石盤が一つあるだけで、教科書はなく、紙も十分にはありません。ひらがなの読み書きができない子どももいるため、まずは「いろは歌」を教え、書かせました。カネはどの子にも、分けへだてなく読み書きを教えました。そのうち、聖書を教科書代わりにして、子どもたちに読ませたり、聞かせたりして教えました。
子どもたちが「少し飽きてきたな」と思うと英語で勉強したロビンソン・クルーソーの物語などをやさしく話しました。カネの話に、子どもたちは、目を輝かせて聞き入りました。
「この子たちのために私ができることを頑張ろう。」
とカネは思うのでした。
しかし、無人の荒れ野の開墾生活は、カネの想像を絶するものでした。常に食料が足りず、草小屋の冬は寒く、夏はおびただしい蚊やブヨが発生しました。さらに冷害や洪水、野火などの災害が次々と襲いました。
「カネさんは、本気でこの土地にいるのかい。凶作続きじゃ生活もできない、もうご免だ。家族がいる郷里に帰りたい。」
と毎日のように開拓者の妻や男たちがカネのもとに相談に

「渡辺勝　カネ入植の地の石碑」
〔帯広市〕

やってきました。

「世の中には、まだまだ苦しい生活に耐えている人が大勢います。私はここを動く気はまったくありませんよ。」

とカネは、笑って答えました。

「カネさんは、どうしてもこの土地にいるのか。カネさんが、いるなら私もこの土地の開拓を続けるか。」

と相談に来た開拓者の妻や男たちは、開拓を続けました。

一八九三年、カネが三十三歳の時、夫の勝は、然別村（現在の音更町）で、牛馬を飼い、牧場を開きました。カネは、帯広と然別村を行き来しながら、働き続け、新しい土地で再出発をすることになりました。

カネは、どんなときも開拓地を離れず、開拓者の妻に助けてもらいながら、六人の子どもを産み育てました。

然別村でカネの苦労はさらに続きます。しばらくは事業も順調で生活は安定したかのように見えましたが、最終的には開拓した農地を手放す結果につながりました。

晩年、カネは長年住んだ然別村を離れ、帯広に戻り、十勝の開拓を始めた晩成社の生き残りとして＊気丈な気持ちをもち続けました。

カネは、開拓当時のことを教えてほしいと訪ねてきた人々に、分け隔てなく、丁寧に質問に答え、開拓当時のことを語り伝えました。

入植の頃の思い出を語ってほしいと学校などに招かれたときにカネは、

「晩成社は失敗しましたが、十勝がこんなに栄えるようになったのですから、本当に満足です。」

と必ず話すのでした。

「十勝野や　枯れ株に咲く　＊リリの花」

一九四五年、渡辺カネは、初めて入植した帯広の自宅で孫たちに看取られて八十六年の生涯を閉じました。

そんな、開拓者の精神は、今も十勝野に息づいています。

＊石盤…薄い板状の岩に、木で枠をつけて、石筆で絵や字を書くもの。児童などの筆記用に使われたもの

＊気丈…心がしっかりとしていること

＊リリの花…スズランの花

◎　渡辺カネはどんな気持ちで、「私はここを動く気はありませんよ」と言ったのでしょう。

◆　今まで、「強い意志」をもって取り組んだ経験はありますか。

【作成協力】

1　しみず　ひろやす	two.seven（株式会社 two. seven） Aflo（株式会社 アフロ） REUTERS（ロイター） THE YOMIURI SHIMBUN 讀賣新聞（読売新聞社）
2　大　川　宇八郎	音更町役場／音更町教育委員会
3　岩　元　悦　郎	NAKANISHI PUBLISHING CO.,LTD. 中西出版株式会社（中西出版株式会社）
4　丸　谷　金　保	池田町ブドウ・ブドウ酒研究所
5　渡　辺　カ　ネ	帯広百年記念館
全　体　監　修	十勝教育研究所

【編集委員】

西川　忠克（十勝教育局教育支援課長）

瀬越　義範（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主査）

山田　圭介（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主任指導主事）

天野　健治（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主任指導主事）

傳法谷　肇（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主任指導主事）

篠原　寛之（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主任指導主事）

飯岡　直人（十勝教育局教育支援課義務教育指導班指導主事）

富田　　元（十勝教育局教育支援課義務教育指導班指導主事）

道徳教育地域教材

十勝野

平成３１年３月発行

〒０８０－８５８８　帯広市東３条南３丁目
北海道教育庁十勝教育局教育支援課
TEL　０１５５－２６－９２４１
FAX　０１５５－２３－５３２０
URL：www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/tky/index.htm